

キャザー

美の祭司

佐藤宏子

英米文学作家論叢書

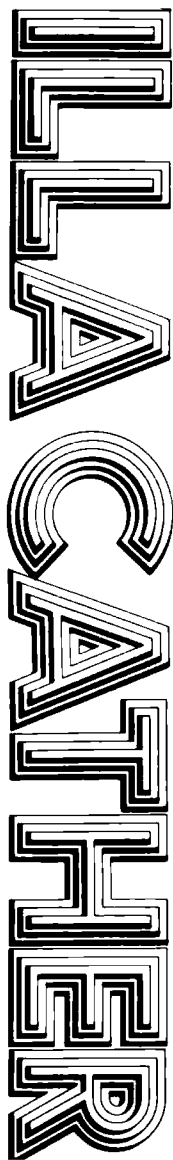


キャザー

美の祭司

佐藤宏子

冬樹社



著者略歴

佐藤宏子(さとう ひろこ)

1934年生まれ 東京女子大学卒業 アメリカ文学専攻 現在、東京女子大学教授 著訳書、『黒人文学の周辺』(共著、研究社) *The Harlem Renaissance Remembered* (共著、Dodd, Mead & Co.) *The Art of Willa Cather* (共著、University of Nebraska Press) L. オーキンクロス『アメリカ文学の開拓者たち』(研究社) その他

英米文学作家論叢書 17

ウィラ・キャザー

昭和52年10月25日 初版第1刷発行

著 者 佐藤宏子

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町2-18

郵便番号101 振替 東京8-7757

電話 東京 03(264)0346(代表)

印 刷 稲葉印刷株式会社

製 本 株式会社 美成社

装幀者 三嶋典東

©Hiroko Satoh 1977

0098-10253-5190

本書の内容の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作権者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

目次

はじめに	5
一 旅立ちまで	9
二 芸術家の原型を求めて	17
三 文化の根を求めて	39
四 道——一九二一—一九二二	94
五 家——一九二三—一九二六	143
六 土地の記憶——一九二七—一九三四	180
七 故郷の丘——一九三五—一九四七	207

おわりに	225
あとがき	232
キャザー略年譜	235
キャザー主要文献	
索引	

ウイラ・キャザー

はじめに

一人の作家を論ずるのに顔から始めるのは随分不謹慎なことかも知れませんが、かつてスコット・フィッツジェラルドについての卒業論文に、プリンストン大学時代の彼の写真をはって提出しようとした学生がありました。作家も映画スターなみに容姿で選ばれるなどということになれば、ウィラ・キャザーなど読む人がなくなってしまうのではないでしょうか。一番よく使われているスタイケンが撮影した写真には、戦前の体操服を思わせるゆつたりとした白いブラウスを無造作に着て腕組みをした、健康そうなおばさんが写っています。キャサリン・アン・ポーターはウィラ・キャザーのことを、「誰かのお姉さんか未婚の叔母さんみたい」(「ウィラ・キャザーについての考察」)と評していますけれど、ちょっと男性的で率直な目をしたこの中年の婦人には、多くの文学者が示している気取りもありませんし、天才のひらめきといった異常な力も感じられません。これは、写真が与える印象だけではないようです。実物のウィラ・キャザーがそういう人だったのです。生前彼女をしたって芸術上の弟子になった人はいませんし、わずかに手法的な

面をのぞけば、彼女の影響をうけたという作家もいません。

そんな作家なのに、生誕百年がすぎ、死後三十年を経過した今日でも彼女の作品が世界中で読ま続けられているのは何故なのでしょう。その問いに私なりの答を出してみようというのがこの本なのです。

現在までに彼女について書かれた伝記、研究書の類はアメリカでも十冊を越えていますし、論文は膨大な数にのぼっています。日本でも数冊の伝記的研究書が出版されてきました。これらの本を通読して気がつくことは、彼女の作品を論ずることなしに伝記を書くことは非常に難かしいらしいし、彼女の生涯を時間を追って辿らずに作品を考察することも困難だということです。これは、彼女の評伝の決定版と長い間みなされてきた、トロント大学のE・K・ブラウンの手で書きはじめられ、彼の死後ヘンリー・ジェイムズの伝記作者として著名なハワイ大学のレオン・エデルの手によって完成された『ウィラ・キャザー 批評的伝記』の影響が大きいというだけのことではないようです。勿論、その轍は踏むまいとした人がいなかったわけではありません。ブラウン大学のエドワード・ブルームと夫人リリアンの共著になる『共感の才能』とか、ボストン大学のジョン・ランドールの『風景と鏡』、フォーダム大学のリチャード・ジャンウネイの『ウィラ・キャザーの作品における音楽』、カナダのサイモン・フレーザー大学のデイヴィッド・ストークの『ウィラ・キャザーの想像力』といったものがあります。彼等は部分的な説明には伝記的事実を援用しているのですが、創作順に作品を論ずることをさけ、主題、手法といった点で扱おうと試みたのです。これらの本には、多くの示唆に富んだ見解が展開されていて、部分的には面白

いのですが、どういふわけか繰返しが多く、全体としては大変煩雑で発展のないものになっているのです。その原因は、おそらく、ウィラ・キャザーという作家の本質と結びついているもので、この本の最後にあきらかになってくると思います。

このような先輩達を反面教師として、私は時の流れに忠実に従ってやってみようと考えています。しかし、彼女の私生活に起ったことを用いて作品の内容を説明することは可能な限りさせて、彼女が活字で残したものを通してウィラ・キャザーという作家を捉えてみたいのです。このような方法を取ろうと考えたのは、キャザー自身が、自分の作品だけを通して後世に残りたいと考えていたからです。彼女は、自分の手紙が死後公表されることを禁じていましたし（現在では、研究者はアメリカ各地の図書館に保存されている彼女の手紙を読むことは許されていますが、それを原文のまま論文等に引用することは認められていません）、一度は活字になった作品でも自分の氣にいらぬものは、生前、二度と印刷することを許しませんでした。もし、作者の意志に忠実であるなら、私は十三冊の小説と、十一編の短編小説と、六編の評論と、三十ほどの詩だけを用いてこの本を書かなくてはなりません。それでは余りにも表街道を行きすぎてしまう感がありますので、一度印刷されたものは全て用いてもよいという許可を自分に与えることにしました。それぐらいのことは、地下のキャザーも許してくれるのではないでしょう。

この本を書くにあたって参考にした研究書、伝記の類は、すでにあげたものの他に、キャザーの友人で一九〇六年以来終生生活を共にしたイディス・ルイスの回想録『生きてゐるウィラ・キャザー』、同じく友人で作家でもあるエリザベス・サージェントの『ウィラ・キャザー 回想』、

カリフォルニア大学のジェイムズ・ウッドレスの『ウィラ・キャザー 生涯と芸術』や、一九七三年十月にネブラスカ大学で行われた生誕百年を記念する国際セミナーでの討論（これは後に『ウィラ・キャザーの芸術』という題でまとめられています）、石井桃子編『キャザー』（研究社）、大森衛著『ウィラ・キャザーの小説』（開文社）等です。原文をそのまま引用した場合には著者名と書名を括弧に入れて付してあります。又、キャザーの作品を引用した際は、出版されている邦訳を用いずに私自身の訳を使いました。

一 旅立ちまで

一九三一年、すでに作家として不動の地位を築きあげていたウィラ・キャザーは、「私の処女作——それは二つあった」という小文を雑誌『コラフォン』に発表しました。一九二二年出版の『アレグザンダーの橋』とその翌年に書かれた『おお開拓者たちよ』の二作品に関する文章なのですが、キャザーによれば、前者はロンドンでの興味をひく人々との出会いを契機にして書かれたもので、「画家の習作」と同様、「伝えようとした印象にうそはないが、非常に皮相的なもの」であり、それに対して『おお開拓者たちよ』は、「気分がのっている美しく晴れた朝、道をよく知っている馬に乗って、慣れ親しんできた田園を逍遙する」ような作品だということです。後者では、意識的に整えたり、「作り出したりすることがなく、全てが自然に自分の内から湧き出てきた」といっています。自分の本当の第一作は『おお開拓者たちよ』であると主張して、中西部大平原の作家としての自分の芸術家像をより完全なものにしようとする、キャザーのかたくななまでの厳しさには、何か異様な感じを受けさせます。

このような芸術に對する生真面目な態度を説明するには、月並ですがネブラスカ育ちのウィラ・キャザーという点から出発しなくてはならないと思います。

現在、ネブラスカ州レッド・クラウドの町を訪れる人は、目抜き通りで、数分も歩けば終ってしまう商店街、ウェブスター通りと四番街の交差点近くに、町で一番高い、褐色砂岩の四階建のウィラ・キャザー・パイオニア・メモリアルという記念館に気がつくでしょう。この建物は、一八八九年、『迷える夫人』のフォレスト大尉のモデルとされている、ネブラスカ州第四代の知事サイラス・ガーバーによって建てられたものです。銀行として用いられていたこの由緒ある建物が、ウィラ・キャザーの記念館になっているということは、彼女以後、この町では何も起らなかったということかも知れません。

この建物と煉瓦を敷きつめた道路をはさんで交差点のむかい側に赤煉瓦の州立銀行があり、その隣の黄色く塗られた雜貨屋の二階がかつてオペラ・ハウスだったところです（今でも屋根の破風に「オペラ・ハウス」と浮き彫りにした文字が残っています）。現在、倉庫として使われているようですが、天井の低い、人がやっとすれ違える位の狭い階段が店の横から通じている風情は、オペラ・ハウスという言葉から私たちが連想するものとはほど遠く、場末の芝居小屋といったところでしょう。

この劇場で、少女時代のキャザーは、弟妹や近くのマイナー家の子供達と、猛吹雪で災害を受けた農民のための慈善芝居を上演したり、後であらためて触れることになる高等学校卒業の際のスピーチをしたりしました。しかし、何にもまして、この建物が、より大きな世界、たといそれ

がドサ廻りの劇団による『トム小父さんの小屋』や『モンテ・クリスト伯』であろうとも、芸術の輝かしい世界を、幼いキャザーに垣間見せたものであることを忘れてはなりません。一九二九年、彼女は当時の思い出を次のように記しています。

毎冬数回は、旅まわりの劇団が町のホテルに滞在し、一週間にわたって私たちを興奮させ樂しませてくれました。……子供たちにとっては素晴らしい一週間でした。興奮は、まず、前触れの人が納屋の壁や、製材所の塀や、薬屋や食料品店の一枚ガラスの窓にビラをはった時から始まります。遊び仲間と私は、何時間もその前に立って、ビラに書かれた言葉、芝居の題名や、どの芝居が何時上演されるかということ、一語ももらさずに読みました。

彼女は更に続けて、夜汽車で町に到着した劇団の一行を駅にむかえる時の心のときめきを語っています。大学生としてリンカーンに來たキャザーが、そこで上演される芝居やオペラは何一つ見逃さなかったという異常な熱中ぶりは、この少女時代の経験に原因すると考えられます。

さて、再び現在のレッド・クラウドに戻って町の中心の四つ辻に立つと、人も車の往来も殆んどない通りの果ては、ただ青空が広がっていて、大平原からのからっ風が吹きぬけていくばかりです。キャザーが子供時代を過ごした家は、現在も、町のキャザー愛好家の手によって保存され、家具調度も出来るだけ当時の品物でとのえられています。この小さな家に七人の子供のある一家が、母方の祖母ボーク夫人と、ヴァージニアから連れてきた手伝いの女と共にどうやって生

活していたのか、ちょっと想像も出来ません。本当に窮屈な生活だったと思います。

町を出ると見渡すかぎり平坦な牧草地と玉蜀黍畑が広がっていて、その広大さと町の小ささとの対照は、キャザーが『おお開拓者たちよ』から『迷える夫人』までの五つの小説と『ルーシー・ゲイハート』の中で描いた通りです。『おお開拓者たちよ』の中で、その自然の美しさを高らかに謳歌した「ディヴァイド」と呼ばれる地域は、「分水嶺」などという日本語からは全く想像もつかない、目に見えない程度に傾斜した平らな大地ですし、それを縫って流れるリパブリカン川の川幅の狭さも、川岸の土埃をかぶった茂みの貧弱さも、『私のアントニア』の中の華麗な日没の場面や、『迷える夫人』のフォレスト夫人とフランク・エリンジャーの密会の美しい情景を記憶している者を失望させるばかりです。しかし、この寂れた田舎町と荒涼とした自然がウィラ・キャザーの作品の舞台の現実なのですし、彼女の出発点であることを忘れてはならないと思います。

ヴァージニア州ウィンチェスターの近くの農場から、ネブラスカ州ウェブスター郡へウィラ・キャザーの一家が移住してきたのは、一八七三年十二月七日生れの彼女が九歳の一八八三年四月のことでした。この地方には、すでに、伯父の一家や祖父母が健康のためと西部の可能性にひかれて、ヴァージニアからやってきていました。緑の山々に囲まれた美しいヴァージニア西部の農場で育った少女と、茫洋とした大平原との出会いは衝撃的な出来事だったに違いありません。それは、『私のアントニア』の中で語り手ジム・バーデンの経験として用いられています。が、キャザー自身、一九一三年八月九日付のフィラデルフィア『レコード』紙のインタヴュー記事の中

で「私はあの出会いを決して忘れることはないでしょう」と述べています。「人間の個性を抹殺する」ような自然との出会いは、ウィラ・キャザールの生涯に大きな意味を持つことになります。

一年間を大平原の農場で暮した一家はレッド・クラウドの町に移りますが、これは子供たちの教育のためと、母親が病気がちであったことから、学校や医者のある町の方が便利だというためのようです。法律の心得のあった父親は、不動産業と農民相手の金融業をいとなむことになりました。この時、ウィラ・キャザールは十一歳です。

近隣の農民相手の小商売を主とする、眠ったような小さな田舎町は、知的好奇心に満ちた女の子には余り幸せな環境ではなかったようです。初期の短編小説や『雲雀の歌』にみられる「村落への反逆」といえる態度の中に、当時彼女が感じたものが反映していると考えられます。その反面、町全体の精神的な貧しさのために、そこで出会った幾人かの人々と彼等の与えてくれたものが、かえって深い印象をこの少女に残しました。

レッド・クラウドの小さな町にも、アメリカ各地から来た「アメリカ人」の他に、新大陸での成功を夢みてヨーロッパから移住してきた人達がいきました。キャザールが魅力を感じたのは、お上品ぶったアメリカ人よりも、様々な過去を背負ってこの地に来た移民たちです。古典語を教えてくれた英国人で雑貨屋の店員だったダッカー氏、ヨーロッパ文学に目を開いてくれたユダヤ人のウィーナー夫妻、流れ者のピアノ教師として町に来て、音楽にまつわる様々な話をきかせてくれたシンデルマイサー氏、ノールウェーのクリステイアーニャ（現在のオスロ）の音楽家の娘で、自身も正規の音楽教育をうけ、ピアノが上手だった隣人のマイナー夫人といった人々や、農場に

いる時に知り合い、町に来てからも接触のあった北欧やポヘミア、フランス等からの移民を通して、ヨーロッパ文化の片鱗に触れ、精神を高揚させる美の世界の存在を知ることが出来ました。また、オペラ・ハウスにかかった『モンテ・クリスト伯』の決して上手とはいえない舞台を見ながら、想像力は彼女をパリの貴族の館の一室に連れていってくれたのです。

つまらない物質的な成功を求めている自分を取り囲む世界とは全く異質の、美しい世界の存在を知った少女が、そのような世界を自分のものになりたいと思ったのは当然のことでしょう。彼女は、自分がレッド・クラウドの町の人々とは相入れない人間なのだということを感じはじめたようです。

両親がつけてくれたウィレラという名前を自分でウィラと変えて、家伝の聖書の記録まで書き直してしまったこと、ミドル・ネームがないのに少女時代ウィラ・ラウ・キャザーと名のついていたこと、高等学校在学中、男の子のように髪を短く切り、男装をして「医学博士、ウィリアム・キャザー」と称していたことは、偏狭で保守的な町の人達への反抗の現れであると共に、名前を変えることによって自己を自分の理想になかった人間として確立し固定したいという幼い願望の徴だったのではないかと思います。

レッド・クラウドでの生活は一八九〇年六月の高等学校卒業と共に終るのですが、卒業に際して、二人の同級生と共に彼女がオペラ・ハウスで行なったスピーチは、他の二人が「自己宣伝」、「新しい時代は新しい手段と新しい人間を求めている」という如何にも無難な俗っぽい題で話したのに対し、「迷信対探求」というものでした。「世間はすでに定評のある限られた人には科学的、